うちのおい物語

十一

へ12
4108
11

へ12
4108
11

# 宇治拾遺物語巻第十一目録

一 あを法師乃事
二 保輔盗人を捕事
三 晴明を負ふ僧乃事 付晴明蛙事
四 河内守頼信平忠恒を殺せる事
五 白川法皇面を受領に下し給ふ事
六 蔵人得業猿沢池龍乃事
七 清水寺御帳行ふ女の事



へ利10
4108
巻11-11

八 則光ぬる人を求る事
九 空入る僧乃事
十 日蓮上人吉野山にて鬼にあう事
十一 丹後守保昌下向して死後経文遂事
十二 出家功徳乃事


佐藤藏書

今もむかし村上乃帝御時に右きさいの氏にて尤京大夫
ある人おわしませり長きうちわたくいとて
うあて御ゆるふもあくこれもうそ
どもわとあり者もあくあくあく

あるべきはずなりしかども乃ちあとをかくしてあとをかくしけ
れども若さで殿上の表道へつきてまことに
あるべきとおもひ人々もちれさもちのよはきてあるべき
ことにのこりとをれどみどりたこしたりあるまて
ことのことのこどもれあまきまきあるく
ちれはるよりくをいせずまて表はうこざんやはと
おりせられくさ先殿はさいあとはくも殿上人
くもさのきはしてこれもとはまできよりはあり
をりとさていはあるはうあくさいあ先んはてとおく
起請をしてをーあくきこの殿ーしてはちあはつれは表を
しべゆんもれをべさけてくれあとあはいさせてあう



れをへとはいれるあてて起請ーてはいくべをもあて
堀河殿乃殿上人すてれをーあるあるあくをく
ゆきうーはるは表人をくをもれくあるあはつはる
えいはちゆくべとのはくをり殿上人をもあく起請
はあるはるはいをもんはきをとあるをていい
さべ先人をはるはるはにをみはれは酒べはをはるは
くはの事あるはとあはをはてせ先乃ーをれ
をべあるべれくせーをもれををはは殿はにく
せをれはべをるはあをはは表あは
れをん殿上人義人うは乃日あはるはは人とはいて也
はれはは乃日はあはて堀川中将殿のあをはは

若乃あつれもべーとてさいつゝの人あり一般と人ぬ
あーこれをく海ぶどに堀河中ね主長をめぐりてかさ
ちゝれいる屋うれ家人乃者ハ者をいそ長かぐぐ
しへあいきやうちらぶまにこぶまてさいるし行り
並長乃あが屋うにめで半紀とそ〻りまきあぬ
ふいさし狐(あこめ)してさしぬきをいろ乃ぐーね紀をき
半ちを随身こ人よまを紀指長をの海きせてびりに
しあ紀くいろぶちをくゆふかーきに あをぐれさーよ
くいををるをてさ半をいま一人ハ行乃枝りよ山嶋
ををぬぐりつけてをくせりりよ紀りりよあをぐ
のか紀人よ酒紀へをく半をまきうに屋うてちを紀清

半ちう殿と乃ふに紀ぐ紀て出半れ殿と人ぐぬ乃ぐく
をちをちふ者ふまをちをよをぬをぬるし御門きを紀て
ふに半ふまて殿とよを紀び半をくし多を紀をゆるハとをを紀へば
女房並道ク半清紀ねよびくきふ〻へ乃れ半に紀ちをを半の
てどをにとめられて手麗あるハ懐ををれハるりをとけ
まぐぐいち屋ちにあるふぐまてにの乃ぐまれ紀ぐをふーと
乃人よりのぐ紀行半れ戦ちをぐめてひくまをけち懐衣半よ
てあを紀をれ紀ぐををりを半をてあるれ乃れ紀ぬれを安ちり半を
をを紀ぬまぐて並ぬ脇あを半を紀行をぐいをぐをを半を紀行半ち
ろれくちをくま安屋乃ぐを紀ふるを半ぬをを半を紀行半
ぬんをちをれあぐ者ふをを半ぬをを半ぬをを半ぬをよく

今はむかし、丹後守保昌が弟に兵衛尉にて冠ゝ
きるとて保輔といふものあり。盜人のたぐひにて
あり市ゝ。家は姉小路の南ゝ室町の東なり。
きるとて、あるひは、よ花をとりて、さて、
弁乃尼のもとにもちてゆく。太刀・鞍・鎧・ふと・絹・布・ぬのどを
乃尼のうしろ戸をとじ入ゝ、いつまゝにて買てあゝい
をとらせよといへゝ。乃尼のうへ、ものゝ
きをといへれば、あるこの絵をゝんとて、
乃内へよび入れゝ。場所にあるあり。
もてゆくを、ものゝかへりゆくを、
入るものゝかへりゆくを、乃尼と絵師うつしあやう

かとこそうづまもろしぬまいぬ事をいかにこのあるを
きつまあるまきあるべき京中をとーあるとなくぬとみとーてすぎ
をりこれ事ゆゑなくきたるあるとなれどもいつかりけ
ふにうちくへあるべきをあるくまくすぎに
けふ

むかし晴明の大師門乃家に老たる人くめる老僧きた
るとぬ十歳ばかりなる童二人ばかりを晴明おに
そのあるとしてあるとすべばかりなの見れ者ども
は陰陽師をあらそんとあるなーしてこのあるに
もぐまてあるーはもてあるうしはてきくすらいさ
いをんとくまいりをるかりをいへば晴明がいはう



おのれ法師をあるーあるを捕へてあるを見て赤袋ひとえと
くきてあるものあるうれはよりなくみくかるべし
これ法師をうーひきさあるべくあるとおもくさをかるる童は
式神をとりたくきてるあるあり町一条邸あるあり
かく現場と公は中に会して神乃内にて市場むとびく
ありうた呪詛とあるのさて法師ーいかるとく法師ね
ばちよりは白して習をんとの法をんを事たいたくく
をてまつーんといへば法師あらをとくいたくくはて
つて額ひかるよあてくをとてーつとぬいまはいねーんとおもふる
法師とはりてをるべきあくを車宿あどうの法あり
きてまくあるにしーと法をくいかるこのをとをはかつる童

此二人あぐらをかいてゐたれば新さらにて物くはんといへば時
明は法師をまねきまねきとりの法師の肩の肩時明はかの法師
ゆへよ人乃ものをとりくはんずるぞといへ
ば法師のいはく肩をさすりてあれ表わわれ肩をさすりたる
ものをとりくはんずるぞといへ
ばいさりあるくまねをしゆくすがたをしたれば
よりくれば法師乃人の肩をさすりてくるを
うやまーき我事にあらずかの法師がまねをして
さ肩をたたかせ物をくはんとめ時明はいでさる事し
給べきといひくはしむ肩をたたかせてさるべきあり
ぬべきをれば乃方よりまた二人あぐらをかく法師
のまへよりいできれば法師乃肩をたたかせ



よ肩をやたるあり仕事をもとめ肩をたたかせ人のつくれある
法師をまねくをまねくをまねくを

まことの一ぢ出でぬべきに、あるべきにあらず。
うりのごとして池のうちさしこみ、行きあひぬと
さてはあるべし。行人、ふうんと僧のいひけれども、
はらう給はぬ。ものもいはで、さてまうんとそ
ありける。ものもいはで、ぬきもたる。
草の葉の蛙乃うへにぬきかけて、
よ和しきて死にけり。あれ見よ。僧どもの
かくしてかうしてと、
つはものの主きぬ。家の中に人あるか
敷とあをりたてしかどもさらに



むう。河内守頼信、上野守にてありしとき、坂東にて
忠恒といふ兵ありけり。信濃の国にありける
うんとくかはらの軍にして、
行むかふよ。入海乃ちかくにあるむうへはあ
をはせうてかちぬ。入海とさいふ所あり。八日
よ発ぐる。あるもの、
はべれど、忠恒、
てあり。
くに乃濱のまくにめくりてあべきにてあれと云ふ
さるに上ぬ。海のまくにはくくる
ぬ。

をゝ迎ゑんをの乃うちよりよせてせりんこてあれ奥州
ハ後のりよりあくあくてはゝこんどれをゝるに奥ごとハ
三風とゝしかくしゝとゝるハいづくをすべきと軍ごとしにをゝ
迎ゑるに軍ごゝ夫ゝ波ゝ行べきをゝうあゝ廻て
ゝてゝよせゝ殺ゝべくハとゝきれで此軍ごゝ此中
よゝうるとゝをゝ乃道ゝをゝ乃ハあゝゝん報信
ハ坂ゝ方ハこれゝゝんゝてゝもゝめてゝれゝゝ乃ごゝ
家乃つゝゝうゝてきゝをゝ海ゝ事あゝこの海ゝ中
ゝは堤乃をゝうゝて乃ゝさ一丈ゝゝうゝをゝくゝをゝうゝ
をゝる乃あゝかゝうゝ海ゝゝゝ乃ゝゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝ
行ゝゝゝゝゝ乃ゝゝゝゝ乃ゝゝゝゝ乃ゝゝゝゝ

軍ごゝ乃中ゝゝゝゝをあゝゝんゝゝゝゝ乃ゝゝ
くゝゝゝ世頼信ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝをゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
る我海ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝて六百騎ゝ乃軍ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
脇ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃重代のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とられさて聞きかちてまうるとなりなどに忠恒いうえと
きつつてぞうせおくんぞんあるこれをうてまいり
あさうち殺くれだうこそたり畠れぐうはまと
さうなりつ濱をまつり行うんるはこのくもし
逆をもてんさうあくまをせ先なりてとかもれ
くんもぞうの軍うろへうめ落の家のかうなる
部等あてうてうは花くいたくと上野殿いこの海の
中に流きみちれはきるよりかうくの軍状引具
してもぞにもうへ来なれぬいうぐをせなうんとも
あくきあるよあうてこれをれぐ忠恒ねくおう
くにすあれうく我をぞしにをあれあんどかあうにたる



てまてまうくんと云て先うちはうちよまうぶ殺うまてう
くさみすはさてくさ上うく小私よ部等一人乃せてう安
てむうへあるうつせ先りをれば寄殿そはまうぬをう
きうせそいそくやうにまやかこ先とあ殺うへて
いうはもぞよきこれ前やさまぞあれうちにもむべきよ
あうぞとそ乃文をうまてう殺引へをれぐ軍たれ
うりをうむうけうちりはく寄殿をだまとにもくれく
いんぐきんよおそくさすとうよくいうそれ所をう
ちまをいまはむう白川法皇香羽殿へたてま
しけるうきか面乃もれぞをに受れ乃面へらるもの称
せう殺てれ笑あうへうそ玄番頭久孝とうよもの

ぬいてうちかのの人にとらせ
たりけるを近衛府にもとめ
さくれば捕へんずるぞ　そこ
じと思ひ給ふ　左兵衛尉源行遠
かねてみしれば　先にあらはれぬ
人の道に入ぬる　後者をとりこめ
てせんとうちみてさいなせ
きれどいうにあらはれ
ぬとよりはあるもの
ぞかしといふ　宮年来の間に
ぬすみをしたるを思ひ給ふる
あらしてあるまゆ
しかりつるものの

まつる物ぬいつるんとて
ぬすみをしたる
ぬすみをしたる
源兵衛尉
ぬすみをしたる
ぬすみをしたる
ぬすみをしたる

さるべきにて行遠の進奉不条返こそ奇怪なれ世に
先ってもおもはんとおもはせてこそ世日あるべきに
かくこそ乃ちさるべきものとつめてもてなせたる海
してこそ有べきに今はむかしなりて後人得業恵乗とぞ
僧あり鼻かぶなりて大鼻なれば人得業といれば
鼻蔵人とぞいれば鼻蔵人とぞいれば鼻蔵人
乃ちいれば鼻蔵人とぞいれば鼻蔵人
ちょうどうれいの日の乃池のほとりにて
ありといへば簡をもてきる法性寺乃前にて



法性寺乃前にて人々歩いてきまかりたるに
乃鼻蔵人かりしきたりとて法性寺乃
ちもあれいるかりかと乃事ふかと公中よりいと
ぞとものぬとんとそうろうそこに
うれ月よりぬたくさん和泉乃国和泉橋はあれしの
まてきこしめくはそれあれいら恵乗いたくへ
あたまるあたにあるんあるのあるにてあやしき
あるれとおもへどもあるとをうくてすきあへなどに
もてにうれ日にあるぬまじんもさうあへぬ
しめきあたまうるうへ乃法よあるもてこの恵乗
はあるうもくまにもあるあじ我さるまにあれども

乃あるふしとこそいとをれたるの事さとわくんずん
りくくんとゆくくに頭法くみくゆくくんくらくくり
法をつまくもあくくず奥福ちる乃南大門乃壇れ
うくよのびりをちていまや彼のけびるくくと
まくらやれどもあくるれのびくんで日を入ぬくく
よあるとてくくとてくくあくくべきあくくゆくくり
きくるたくよれとは橋よ目くくくくりあいくりをくくを
こ乃恵布あれあふふの目くくくくいくゆりをふくを
めをくくくくをあくくをいくくくりをくくりといくゆり
けるこ乃恵布ゆくくれくくくいくくくく

もちまうてゐるべきこゝのうちの人をもれぐ〻うの事
をたゞ〻先〻一ぢ者くあり志を法師まとして法
性乃あるこゝろをいとこゝろくさをみておりのうちと皆
とゝろく義を先くれあるこゝろ乃ひりをとれをれ義の
おくに法性乃ろこゝろをもてまへのあるこゝろ先
ゐりよりさまあまとよりうにくめが者き拍乃ものきにに法
そあんあまとかたのよ沈れなどの思をまてをつく
てゆ解ゐられさらにおそをじをうの者をもとをいて
あり先をとれたちやうはぬひくさいゝせんとして思
ひりよりに法性乎法統をまりてまり出べき解うをいを
ず題一さいゝせをふゝいのんとをして大を者ぎの内に



さう入くをまぬまゝうゝ法ぐ法をうる義にあどさう
志くをあるぐ者ぐゝめどん拍法ば結をゝぐあり
ゐ入ゝさいゝするあやゝ先事ひりをてまゝ法を
ゐとをくるさてさ先事をるにまゝ行あゝ解にあに
あまをぐゝあゝくゝ題一さいゝせ川やうにをゝをゝを
題一者をてまつ法ゝのあをを法ゝゝ者ぐゝをゝ
乃者ぐゝを乃ゝぐゝ乃ぐゝうゝめてまゝんハひくいる
べきゝうをいまゝめゝれ者をぐめゝをゝをゝさ
羅んを僧へ法性のゝをゝ法ぬすゝ者ゝ義ゝをう
者めぐんぐゝんとゝ思ゝをゝるゝ者れぐまぐ夜姫
くゝをゝろよ入ゝ法ゝ法ゝ出よ者り者題法いゝにを

もべきなりんと思ひくひき初ぎて乃ちくきるべき
長をもあれりよさそこれをきぬるしてきんとおもふ
仏つきぬこと絶えるの〜てきて乃ちみとるふか
ところもあまこ女ようもあれわくきにをかき
をれよ思されてくそ浜あるこのよりを紙をか
ちくまてきりて大事なるこ乃うまこをもう乃
きぬをとくきぬ御んさとゆぎ所よもさいを
くりさせをれたうるくにるりきるとやうにをつく
人乃ようを物ををそよ紀男ようをめされくる
乃しくてであるをるさまにうれ衣をばかさめて
をるべをんどやうにをりにそうりをけ

あるべ所なりあり
つまをくむ〜駿河前司梶秀遍ら又よ陸奥の国
乃りを川とい人をををしを家よはあるねども人を所
絶うを力ればどうつよりをる世乃ちかく絶ど
あるをるとあくて来ぬ乃蔵人をであるとける河居
所より女乃をとをとめとて太刀をそ絶てくる小舎
人童ををを〜一人をして大文をとをうにいきをれで
大塩乃内よ人乃ををるをきのをれをかう絶し
と思くまをるをるに八九日乃よ物をて月を西山よ
ちあくまりをれで西の大墻乃内に新て人乃をてん
ををくぬよ大塩乃方よりをとをるをぐうしてあれをぐ絶

人さうとゝ俗まこゝ云遊乃かくしまのすがく魚をもとめ
とゝのをれをれでされいこゝてと思ふくすこそあゆこてゐる
をあまいさていさりあんなとてさかゝるとてをたゝき
きれでうつあまてみるに弓れうきいみゝを太刀乃きゝく
こゝてえゝきれでまゝよいあゝざるとをりとれのれそく
ういあゝて遊を追付てゝれでれうちとゝ魚あとお
かゆまさゝあそゝよかゝさゝ海よあとゝるとゝれが
をゝ船のそゝつとゝやまりて魚そゝ海りあゝどさ光
よ出さゝれでゝそゝ光てくゝゝゝ光ねきて打きれい
頭を中ゝうとうゝとゝ光とゝ魚べうたゝゝ光て
つとまゝうべぬゝゝそゝんとゝかゝゝのゝどにあゝべいた

志津ゝうゝとゝいたくゝまゝゝ拍ゝくゝゝつとゝあゝりゝゝれゝ
をを魚をゝそゝあゝ人ゝゝ脇よゝきゝ乃ゝくゝあゝ海をゝをゝけ
き屋ゝ乃ゝとゝいたくゝくゝゝゝゝゝゝてくゝゝゝものくゝ光
乃ゝゝとゝかゝゝゝゝゝゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

きつ[illegible]ゑんど秋仏さをけ法へと合てだ刀
ぜ行こ乃屋うに和尚分てもつとさやまうらも
のよけくかよ姉とさちむうれあまこづるくと
あそせてそつとあうにもう屋川もきりもれ
ろをあまるをにちあくそつとあうてきれいきぬに
されむうときり行こ乃屋うにもちさうける太刀あり
をまこむうきそれくく中うとさ行りきりる法太刀
乃東を為てきまこのをさ海いよさこまさうけ弟法
きうて弟まこむ太刀をもちさふいれもとあくうちう
れとして宝りこてもつものきてまこさんあるとれく
をまこむとを人乃をとをそうそれをもつまれて

中法門乃門まると入きくもうにうれうれくさをもてい合
人者ハいくこ志法こんと法をれこく童ハ大こをとのこう
よなくくいき弟る法よこ弟ハよ法ちこてもつと
きよ弟り殿居所よりてきこくをうとよせてさうく
うくをとれこりをるうくの乃きねこ一ぬきうは血乃
法きこりり弟まこ血こ言ってぬくあくさせて言の
口よくあくめて太刀に血乃つきこるあこれあこきこく
めて殿ねあのよさるとまれくて入こ弟にこりこよも
よあう弟こ乃屋川ときまくやあこんどこんとひぬ
うちさを法こくわうよそによあきてのち法こを
いれさこくこ大こを大炊法門名よ大弟法男三人いく

そどもしてくびきりてもせうあるあさ海くつろい
さるる太刀の刃かくみよきり合て死るものとられ
ぬれば太刀乃法ふるいさ海あり敵乃ちからける
まやされどねをとをかぶ一死さまよぞたろ刃と
いれ乃ち太郎殿と人どもいつゆきてゐんくゐん
とてさうしてゆをもぞゆりじやとはんどもいざ
らんをまくられぬさ海あまをぞたぶくよいぬ
車に乃りこがまて屋つとしてこれぞいまぐこも
くをもーひきでを死ぬりをるに斗ひすあまり
ぞるとあるる男乃ろくれを刃るが垂文乃袴ようん
のあくれさしのあるをきゐ吹のきぬ乃秋よくさ



さるをさるる死くるが狐乃さやたろれをろうさやーさるる
さるちをきて申の時はれさびよ当きるとを死あり
くをもきをかきれよれをさしてをしきかうしき
拍ひ人男さをりぞを男よりとみるなどに雑色の
しるをきてあ乃かとこのぬを人ひくきにあんくつう
うをつりさるふとやといれあきぞうをくくふ
ひるかをこの刃とひるものなどに車乃まへよれひとく
流殿と人の乃れかをあ死くーのせよるさいとをんを
ひ人ぞ雑色をくひとをうりてくーをきてきこをられ
ぬさるつくれぞうをて死をりを刃をりを刃をりを
ひあくれをひるる男れ畳目にをあーかをひざつき

くさぐさ物がたりにしかばねをまくらにしてねたるものとおぼしき
面もとゞとゞとへだてなのの夜中ばかりに物へさるる
をてもく物語りをしたる所とて物のこゑ人かまくしたる
ようすぎるん屋としてもくきてはたらくきてはたらくてきたると
ぬるを人なめりとおもひ行くくあくくへあせてはあり。
けきこえれどもなにとおぼしきこゑつゞけ
うてさるこゑきこえず敵をして仕り申さるるかう
とおぼしきてこゑやれとも物さつてかくさつて物や
こさきちぬいぬをすべをさしかけかさかせうをれ
むくくさてくこゑいれをけくこゑいとくくあふ屋
うにてかうをあるかけよそ人よりつうえて



面をもくこゑをらまてこけるきーこゑやこるかん
とくこゑきこえおぼしくきれとをのこるものこゑき
きうきれどうれのゆつて屋をけとかこれての
ちよるどもうをかうけ
おきをいまはむりかつ川よりあをぞんする事と
くまり紙陀稼るにして百日関法かこれれば
ちかきこゑ池をものどもこゑあくどかのみこゑき
ちぐふ女房車屋どいまあり。これこゑ世あるりくう
ある僧乃おこゑ屋うかくる自然をくくよんあくせす
稼ありりよくくあくこゑ仏をやうれどこゑ後へ
くちびふどうこゑくこゑ八念仏をかりとこゑ

きこえたくうろこにいきつかれたるこのかたにてはいとめずらしきものどもみうけはべるえんあるをんなとはべれどもをぢもの目にもとまらぬものどもらもとあちらこちらにたちまきあれもやうにてにうれはとつたくさくハ堂へ入るくさぬよさまへ入らう僧どもはかくあゆこはくぬくうちまるとに雑仮車にこの僧ハ紙乃衣裳袈裟などきてはかりまるにとりあるようくちひるまくうくんよめもんあるせもてはくだいきぬうくなのゆくえうまとまるかんぬもものまるうちはきをあくこれ乃ゆるゆるにるうちをあるいりよあく国えれよりるまくくしかざーあくハかあらぬあどにつまてて氣ゆくうるるくくとくまとはくいふ高まぬまをまもあるものをれどかうハこの庭ハいふまでいまぬに入るんむるにまんまとまくくにまるくくあまをくくあどいふーあてあやしまれるまでまぬくものもありまてゆきて十条乃まえあり

いまーたれハ京ちまいはあらまて入るれ屋ぬまんとて河原乃石ようもつくくくくつどにまりはまくくへ車屋りるせくまとて迄ぬ屋まいあん河でせくいふまもひる僧ども申れやぬにあらはあらといふ

住生人刻限ハはまぬーあんかるふハいまーくくせと

つよ後り孫さく[illegible]ばくくるもきくるもれハ後あで[illegible]
て河原人さくあるよいるもぬ[illegible]とみそそんと思こ海
をのもあ[illegible]そうこれど中よ僧乃あるが往生よハ
刻限やさぐむべきぬくねとこれといさあくいの
おどにおの乃往生そうきれてあるむるれくこ河よざ
おりと入おどにあだくこかるあそにあ[illegible]とのをて
法ずるをいくでもしくなどに弟子乃往生ず
[illegible]生ハさうさ海よいりておくとするを男乃
川へ行ムとさうざりてくるひとそ生そあざこれ往
乃ものとおりて引おを生れで左右乃ありてくるこ
ひてくくみるるあ[illegible]ば生てくこみ引上る男

よむうくくよ[illegible]て廣大乃山恩[illegible]ぬ
乃法恩を極樂よてやさあくくんとうくるくあ[illegible]
のあるあとうくあ法まるを生るものを生ア河原
ぬ石をうてぬきあるあ[illegible]法師
乃川原ざるよきとはどれ生るものをうを
をく打きをくれうるれ[illegible]乃法師や
あくきん大れもとれを人のをとん屋うきる文乃
うくあきにさき乃入れ上人とかきをうを
とう
むう[illegible]長聖山乃日蓮のきんよ[illegible]
あるを法師きるに生行七人をうれ鬼身のあい[illegible]

乃色うせ、髪はハ大乃ごとくにあかくなりてかくしゃ骨
とおとにさ一出さくるめ、ゆ見てくるめく膜はかくさと
きるるかおの乃ゆこるれ人よりあれくるよ結つねくるなた
りぎらとあ一ふれてくるに事する鬼ごとくハ乃鬼滅
よむをびあるくゃ乃くれたこのてゑ百年をすぎて
乃むりくんてゆ一ご人の生先ようくみとうて
いまよてゆ乃鬼乃身とあってゆさてくれてくる我
ハ乃ごとくにるをもうしてけうをごゑ孫ハこ鬼
くるよゆつるあまてゆ乃ちうけくゑとこゆしくて
いまハちうをべきゆるくひをぬまれでゆ我ゆれら
うむまのをかくうゆるゆるるゆまてをきりてちうゑ

さんとゆうれハいよつきてくゑ乃むまれ乃我をきゑ孫
ちうをゆゆるをべきゆるくあ一瞋意乃ゆれ河てゆれ
ゆ乃ゆるくよをゆをゆゑゆ敵乃ゑ孫くををくてゆ
ゆ乃ゆるくうけきをゆ瞋意乃ゆけのゆうをくこが
きてせんくゑ鬼きくうこれのこうをゆうゆけゆ
ゆをゆくこさゑらゆ一くゆゆけゆ極楽天とうをむまれ
ゆゆ一ゆとゆくをくゆ先てゆくゆゆ所ゆを
あくて五量億劫乃昔をとうをんくすゑ事の
をんゆくあくるゆ一くゆ人乃生先ようくみとのを
をゆはをくゆ一ゆくくゆをゆ所れ生ゆくてくてゆ我
敵乃ゑ孫ハ法をきをてゆをくいゆちハきえをまゆを

ゑ
ゑ
ゑ

あまをもつまはむとて・舟はなる保昌をへくだりけるを
をれば佐乃四郎白髭乃武士一騎あれはやとて船の
うへへとりあがれば木枯下にうち入くとりあつめて
司乃郎おどもこのあるじ乃ものとりざまかな
ものいはんかりそめにもあらばいかに國司殿い
かく一人尚なのるべきにてありけるぞ
ぬしぞとむべきにとせいてうちすぐるおどを
聞ばうりて大矢乃左衛門致経数多射をと
ばしてあつりかぶ司舎人ひとり同致経うつくこ
よ発ちや一人逃まもてはつくん致経又平家
に仕堅固乃田舎人にてゐ細をとつずを孔を射

しはつる人とりあ後絶るとて乃ちさまをだにあるとて
をるとう
あまをもつまはむとて・法師しにはさうの人とや
舞乃形をまもまもまだれわるよ波打しける僧の
屋でやとく程ゆ寄るよ夜中ぐりにしかりぬん
とおもふおどに成るあまをとあまをくん乃ものを
きくおどに舞ひまし法師をとうあまをの屋ぞり
をする僧あ屋しと祈くおどにこ乃ものれ内ゆり
佐うとおもふあうまあさはしときけばあるか武蔵
寺よやさいろと法ふとおもふあまをおさを佐ふむ
乃佐ぶとおもふあるを武蔵寺に新佛ひで法べしや

く梵天帝尺諸天諸神あつまりあつまりたまふ
なるべしといふあれどさるべき事をなさんと海つら
ざるをりうまれつくるにあらでいかなる
ゆゑにかとうたがはしくさだめんずるとつゝむ
已時ばかりのことなりうかるゝにさいはひまちゆく
さんとてをぬこの僧こゝろときて希有の事をも
きくつるかのあるじ八幡へゆくとおもひまどひこの山をみ
てあるていぶちもゆゝしきやうとおもひあるやうにて花とむ
きゝ寺にさるべきものとてこれぞきゝもあへずいとう
八中ゝ志ばかりに人をあつこれあるあゝあんとおもひて佛か
ほまゝへよりて已時ばかりまちかゝるわどもこゝにあ



らくゝ午時ばかりなんとおもひてにとおもふるわど
よりて七十あまりばかりなる翁乃髪をもてゝ
きゝてもおろゝあるゝよりあるゝ後ばかりにこの山をて
をもちいさゝかりなるまゝ
あゆむまゝりに尼ぜうらいさゝらなきゝ稲はけたる
あゝゝむ把つまてゝ引きさけをうゝ佛堂よりまゐるそ男
八幡をも乃帝まゐるへてぬ二三度手ばかりてをくゝ
もゝ公様の大きにあるべきゝ
をゝゝふ稲とゝ雅のおゝふ
らんとていぬゝるべ
きゝるゝ

作ろうとて一こしきふあすはしぬ所ゝよさ
ありに出られぬ事なれば乃ち
都ゝく成者ゝに成あんと思ふ
しもとしいとさとうの純事ゝ成さぞ
て小桶あらはるゝ八湯あり者自ゝ
ひろく刺ゝ成戒さ成をつまこ
ゝとおぬろ乃くらまゝこと事なり
あゝ猶隨き成ゝ天ゝ成ゝ
をあよとしあるにしてあるとき
ゝ大今にゝ出ゝる事にあゝ
ゝくゝ成者ゝて隨ゝ成ゝ